

「児童の社会性の育成における評価についての研究」  
 -小学校高学年の学級集団づくりのための活動を対象にして-

所属校：調布市立国領小学校  
 氏名：瀧口 信晴  
 派遣先：東京学芸大学教職大学院

キーワード：社会性・学級集団・個と集団の見取り・指導と評価

I 研究の目的

特別活動や学級集団づくりを通じて社会性を育成する従来の実践・研究においては、指導の結果の「評価」が各担任の経験則に基づいておこなわれてきているという感が否めない。経験則による把握は不可欠であるが、指導内容や指導方法が学級のどの児童に対してどのように反映したのか、学級の様相はどのように変化しているのか、を考えるための指標がやや少ない。そのため複数の学級集団の状態を担当間で情報として共有し、協働やチームとなって指導にあたることも難しい。平成20年1月の中央教育審議会の答申において特別活動の課題とされた「子どもたちの資質や能力の育成に充分つながっていない状況」もふまえて、特別活動における「社会性」の指導・育成の過程や結果を明確に示すことが必要なのではないか、と考えた。

そこで本研究は、第一の目的を学級内での「社会性」を把握するための児童用自己評価シート項目の作成とした。第二の目的は、その結果を客観的な数値・図表で可視化し、グラフ上にプロットすることで学級の様相を把握できるようにするデータ処理ツールの開発とした。これによって個や学級の成長、担任自身の指導を評価できるようになり、次時の指導の指標として活用できるようになる。児童の自己評価によって学級の様相を把握する方法をとるため、自己評価能力の発達段階を考え、研究対象を小学校高学年と限定した。さらに「社会性」の把握をおこなう上で、望ましい集団活動を構築しながら「集団の一員としてよりよい生活や人間関係を築く」ために大切にしたいものとして指導要領解説の中にある「連帯意識」を中心概念として調査・研究を進めていくこととした。

II 研究の方法

- 先行研究の資料収集
- 文献研究及び概念・用語の規定、児童用自己評価シートの調査項目・内容・方法の検討
- 児童用自己評価シート、「連帯意識から見た学級」グラフを用いた調査、結果の分析・考察
- グラフ結果をもとにした追調査 研究のまとめ

III 研究の結果

1 児童用自己評価シートの作成

(1) 基本的な考え方

「社会性」を評価する上で先行研究を踏まえながら児童の実態に沿った項目を設定することとした。学級集団における「社会性」を研究したものを参考にし、学校教育で「社会性」を育成する際の主な内容として上がっている5観点(基本的な生活習慣・対人関係 集団活動・規範意識・社会生活)に着目し、特に学級活動・学級集団活動の指導過程において育てたいものとして、「対人関係」「集団活動」「規範意識」の3観点にしぼった。さらに「集団活動」を相互作用・役割分担の観点から「自他に関すること」「対人関係」を信頼感・協力の観点から「他者に関すること」「規範意識」を規範・自己有用感・自己決定の観点から「自己に関すること」という3要素で表した。また、「小学校学習指導要領解説 特別活動編」中の「望ましい集団活動の条件」6項目を分類し、ア・イ・ウを集団の「機能面」、エ・オ・カを集団の「情緒面」の2面にとらえた。またそれぞれを小学校の実態に合わせ、「機能面」を「役割を果たす」、「情緒面」を「気持ちを通じ合う」という言葉で表した。

(2) 具体的評価項目

以上の2面における3要素を指導要領解説の中にある文言を用いて評価項目を設定した。

	機能面 「役割を果たす」	情緒面 「気持ちを通じる」
自他に関すること (集団活動)	<b>役割</b>	<b>所属感</b>
他者に関すること (対人関係)	<b>協力</b>	<b>心理的な結び付き</b>
自己に関すること (規範意識)	<b>共通の理解</b>	<b>よさの認め</b>

この表中にある「役割」「協力」「共通の理解」「所属感」「心理的な結び付き」「よさの認め」の6項目を児童の自己評価により測定する「児童用自己評価シート」を作成した。

## 2 研究仮説の設定

### (1) 連帯意識の構造モデル

「連帯意識」を中心として以上の6項目の関係を表す図である。

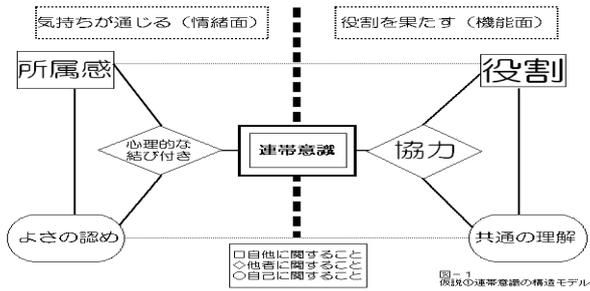


図-1 複数の連帯意識の構造モデル

### (2) 児童の学級への関与モデル

設定した項目から作成した「児童用自己評価シート」の測定結果を「情緒面」を横軸、「機能面」を縦軸とした座標軸の中に位置付け、個々、集団の把握を可能できるようにし、各象限に位置した児童がどのように学級に向き合っているかを想定し、特徴となる言葉でそれぞれの象限に名付けをした図である。

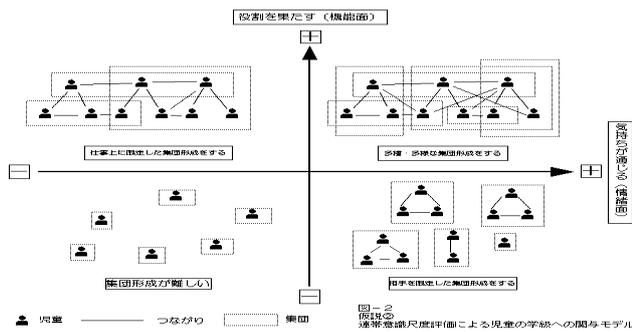


図-2 複数の連帯意識尺度評価による児童の学級への関与モデル

### (3) 学級集団の発達モデル

児童の学級への関与モデルの児童の分布を学級として大きな楕円のまとまりとしてとらえた時、学級集団の発達過程を表した図である。

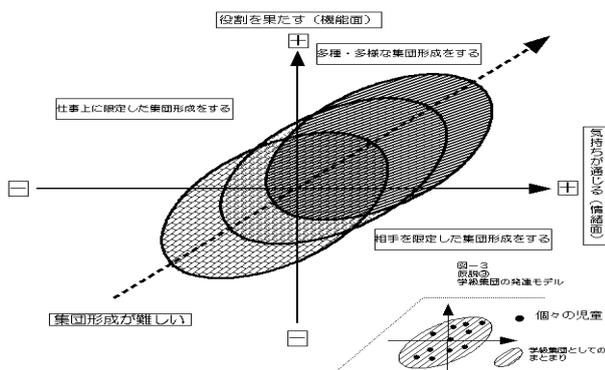
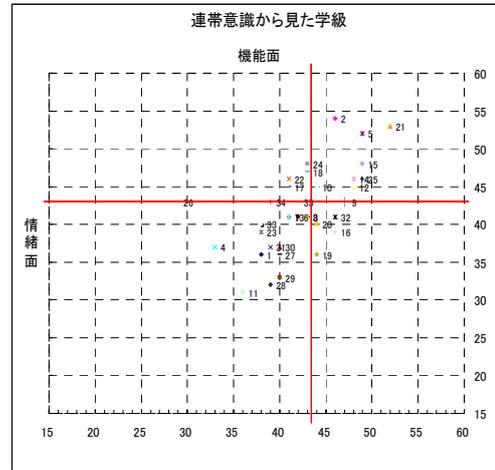


図-3 学級集団の発達モデル

## 3 「連帯意識から見た学級」グラフの有効性

都内小学校7校の5・6年生、25学級、総計759名で調査を実施。作成した「連帯意識から見た学級」グラフを返却し、その結果を見ての担任の追調査を実施した。その中の設問「学級や個々の児童を把握するための尺度の一つ」としての活用についての質問には

90%以上が有効性ありとの回答を寄せた。この結果から児童用自己評価シートを用いた「連帯意識から見た学級」グラフによって学級の様相を把握し、次時の指導の手だての一つとして活用することができるということを確認した。(下図は学級の様相例)



## IV 考察

### 1 活用方法

このグラフは、具体的な指導の前後に複数回、継続して作成し、個々の児童の変化を把握する、ことが原則となる。また、評価が劇的に改善した学級に着目することで望ましい学級集団づくりに有効な手だてを発見することも可能となる。なお、複数回の実施が時間的に困難な場合、一回の実施でも以下①～⑤のように活用することができる。

- ①担任自身が学級の児童についてグラフの中に位置付け、児童の自己評価と比較し、評価の差異を把握することで次時の指導の手だてに活用する。
- ②学級集団の様相、個々の児童の学級への関与意識について知り、学級経営や個別指導の指導計画、指導方法を立案するために活用する。
- ③個人面談での資料として活用する。
- ④グループ編成・学級編成での資料として活用する。
- ⑤「児童用自己評価シート」の回答や表記に注目し、児童の思いを把握することで指導の手だてとして活用する。

### 2 発展的課題

様々な社会性育成プログラムを分類し、どの象限に位置する児童に対してどのようなアプローチが有効であるのか、ということをはっきりさせるまでには至らなかった。自己評価シートの質問が30項目のため学級の実態によっては複数回、継続しての調査が難しいこともある。より短時間で簡便に調査できるように質問項目を厳選することが望ましいと言える。